

る等日本精神をいかになく發揮して居る。宗祖弘教の生涯は又  
如來の智（空座）仁（慈悲）勇（忍辱）の顯である。即ち「太  
陽の子」たるを自負し理想とせられたのである。八絃一字一六  
合一都の日本精神は久遠悠久の昔より盡未來際に至るまで赫々  
たる太陽となつて全世界に君臨する。然かもこの太陽の三徳を  
強く自己の信念とし宗教とし日本精神に生きられたのが日蓮上  
人なのだ。

斯かる偉大なる宗祖を戴く吾等は宗祖の信念を吾が信念とし  
宗祖の氣魄を取つて以つて吾が氣魄とし本門の題目、本尊、戒  
壇の三大祕法を以て一天四海闊浮同歸の大願業に邁進しなけれ  
ばならない。

我等はこの事變を契機として、渺くとも日本皇國の大使命た  
る「八絃一字、六合一都」の大理想を全世界に將來する前提と  
して先づ東亞の天地を寂光土化する廣大無邊なる神意の發動な  
りと信解する。經曰「今正是時」と。さうだ正しく今だ。皇佛  
冥合、闊浮提内廣令流布の時は實に今だ。この實際化こそ現代  
青年宗教家に架せられたる一大使命なのだ。

その使命達成の爲には「我れ日本の柱、眼目、大船とならん」  
の大願を奮ひ起し、併せて忍難事勝の聖人の「立正精神」を体  
得發揚する時、東亞否、世界全人類永久の平和の光が輝き渡る  
であらう。(3)

(完)

## 雨の夜更け

磯邊 涉

雨は強く降り出した。晝迄は蒸暑い曇天だったが夕方豆腐屋  
のラツバが町に響いて夕餉の支度に取りかゝる頃から、降り出  
した雨はもう本降りとなつて、風も加はつた。前の檐が大揺れ  
に揺れ初めた。トタン屋根を打つ雨音は強く、雨水が電灯に光  
つて屋根から駆け落ちる音も騒々しい。窓の隙間漏る雨風！  
それも不氣味である。私は虫の性か今晚に限つて強く泣き喚く  
二つの妹を背負つて玄關を出た。子守の爲である。父母は止め  
たが泣き喚く妹を見ては黙しては居られぬ。表は篠突く雨で、  
兩足が白く地に躍る。空は雨が風に霧の様に吹き飛ばされて居  
る。私は着物を上げ、飛ばされさうな傘を手に流れ行く泥水を  
ビシヤビシヤと歩いた。妹はすぐに泣き止んだ。

暗い街燈の下を行くと海へ出る。眞黒な朧物とも思はれる波  
浪の打寄せも物凄く海は猛り狂ふ。傘も吹飛ばさん程の風に獅  
噛付く様にして泥濘道をさけ歩き乍ら、妹が濡れはせんかと氣  
遣つた。遠く闇黒色の海の彼方の明滅の灯は燈台か漁火か。燈  
を流した沖は灯の他何一つなく自然の荒れる儘である。時折ト  
ドツと打ち揚げる怒濤。私は急いで町の通りへと向つた。追ひ  
立てる様な怒濤と雨と風である。

街燈の薄暗い途を行くとホテルへ出る。灯とネオンの光が闇

を漂ふてかすかに道を明るうする。何時かのジャズの音が嵐の底から聞えて来る。ホテル街へ出ると女給風の女が一人前を歩いて居る。蛇ノ目傘が貴かにネオンに映る。雨は横殴りに物凄い程である。鐵筋作りの十数の不夜城も物音一つしないで、雨中に建つて居るのが實に物寂しい。こんな夜は客が無いらしい。星降る夜の盛況に對して何と云ふ悲惨さだろう。風雨の厳しさはホテルへの暴客の如く又家の塵埃を洗濯に來た掃除人夫の如くにも見える。私はネオンの灯を浴びつづ足に降りかゝる雨の冷たい觸感を享けて其處を通りぬけ大通りに出た。自動車のヘッドライトが濡れたアスハルトに映して音もなく過ぎて行く。店のガラス窓が暗く光る。街燈や家を漏るる灯がアスハルトに寂しい影を落して居る。ポプラの街路樹が颯々揺れる。激しかった風雨は小止みとなつた。電車が響々と重たさうにしきんで通ると雨の夜は一入靜かになる。

私は妹を寝かす爲に子守唄を唱つた。妹は聲一つ出さずに背に居て寝さうもなかつたがやがて寝入る氣配がした。子守唄を唱つて居る内に私も何か寂寥な氣持になつて、自分も幼ない時母の腕に抱かれて子守唄を聞いた事もあるんだと思つた。歌の中には父母の無量の愛と、苦勞を忍んだ父母の血が解け込んで居るのである。懐しい歌だ。人として子守唄に心打たれるは當然である。私も今は歸省して父母の慈愛深き腕に懷かれては居るが、初めて父母と訣別して他郷に行つた時の氣持ばそして月光皎々とした夜異郷に開いた子守唄はどんなだつたらう。私は

自分の歌つた歌が深く胸に食ひ込んで來て父母の鴻恩に感泣し噎んだ。

餘り遅くなると父母が心配すると思つて、歸途についた時は小降りになつて細い絹糸の雨が晴れかかつた中空から落ちて居た。妹の寢息が靜かに聞えて來る、可愛いものだ。

暗い家で扉の上にサククロの花が灯にほんのりと顔を浮べて揺れて居る。「ジジ」と眞暗な闇夜の何處かからか蟬の聲が聞えて來る。自分の泥道を歩く音が妙に寂しくビシヤ／＼と闇に響く……(3)

——九月十日——

### 沼を想ふ記

小林 是 淳

その沼には童子の夢が潜んでゐた。青い沼の水は時々白雲を沈めて深々と澄すで見えた。雨が滲みついた薄黒い切株にはヌルヌルと苔が生えて、山藤の蔓には青いトンボが靜かに止つてゐたりした。私達は放課を待つては沼の畔に集つた。

蜻蛉や蛙を追ひ廻して、ひねもすを暴れ暮す楽しさ……だが小さい暴君の一團は毎日のやうに仲間割れがしてそして一方の大將が忠雄君である時、他の一方は決つて僕で、小さいなりに殺氣立つた喧嘩隊は沼をはさんで對峙した。

弱蟲！ バカヤロ……こんな應酬にいゝ加減倦怠を覺える頃